

不純な小説のために

——ヴィエト・タン・ウェン「アメリカ人」と現代合衆国文学の位置

井上博之

英米を中心とする文学研究の変遷を概観しながらこれからの批評の可能性を探る『文学批評』のなかで、ジョゼフ・ノースは1980年代から現在にいたるまでの文学研究において支配的になったのがコンテクスト重視の歴史主義的な手法による知識の生産であると指摘する。この支配的なアプローチに対し、批評の新たな枠組みとして20世紀末以降に登場した複数の潮流をノースは3つの大きなカテゴリーに分類しており、その1つは「拡張」(“Expansions”)を求める動きであるとしている(North 125)。特定の場所と時代を対象に高度に専門化された知識の生産を目指すのが歴史主義的手法であるとするれば、その拘束から決別し、文学研究のコンテクストをさらに拡張するために「環大西洋」、「トランスナショナル」、「グローバル」、「世界文学」、あるいは「人新世」といったスケールの大きな概念を軸にする研究が次々と登場してきた(North 185)。ノースによる文学批評史はこのような近年の潮流自体を文学研究という領域の内部から歴史化する試みである。ノース自身も意識しているように、文学研究に特殊な事情だけが世界文学への近年の広い関心を説明するわけではもちろんない。そのような文学研究の動向自体もほかの大きなコンテクストとの関係性のなかに存在している。アメリカ合衆国の文学研究におけるグローバルなものへの関心は21世紀に入ってから国際的な政治情勢のなかでのこの国家の立ち位置、地球規模の環境問題への関心の拡大、生活のために国境を越える移民・難民の存在などを含む複数の要因と結びついてもいる。合衆国の文学を「ほかの地域、ほかの言語や文化」が交差して形成される網の目として捉えるワイ・チー・ディモック、「文学史上のあらゆる時期においてアメリカ文学がより広い世界と複雑な相互関係を結んできた」過程を重視するポール・ジャイルズは合衆国文学研究において「拡張」を志向する動きを牽引する先駆的な研究者である(Dimock 3; Giles 25)。そして世界文学研究と翻訳研究の延長線上に自身を位置づけ、「複数言語で複数の場所で発生する」現代文学は「国民国家を代表するという理屈にはもはやそぐわなくなる」という意識を土台にして書かれたレベッカ・L・ウォルコウィッツの『生まれつき翻訳』もまた、この大きな流れから生まれた研究成果である(ウォルコウィッツ 43)。

「拡張」を志向するさまざまな研究動向のなかで特定の国民国家の文学史や言語の枠組みを自明視できない状況が一方にあり、他方で大学のカリキュラムにおいて米文学史などの国民国家の枠組みを前提とする科目が引き続き教えられる状況が存在する現在、アメリカ合衆国の文学はどのような作家や作品によって構成されるのかという問題にあらためて向きあう必要が生じる。加えて、おそらく日本の英語圏文学研究者の多くが大学で英語を教える語学教員でもあることを考慮するならば、英語という言語自体が持つ優位性にも無自覚ではいられないだろう。(その大部分が依然として白人男性作家を中心に構成される)合衆国の文学史を教えるときにも、語学としての英語を教えるときにも、特定の国民国家・文化・言語の覇権に加担しているの

はないかという意識と無縁でいることは難しい。英語を第一言語とし、合衆国のラトガーズ大学で教えるウォルコウィッツもこうした問題には意識的である。「商業上、科学技術上、少なくとも現在のところは、主要な言語」である英語で書かれた作品は「翻訳されなくても成功できる」状況にあるのだし、さらに「英語小説はほかの言語の小説よりも翻訳される可能性が高い」のだから、英語で出版される小説は世界の文学市場において二重の優位性を持つといえる（ウォルコウィッツ 21, 32）。ベン・ラーナーとジュノ・ディアスの作品に触れながら、どちらの作家も「合衆国の英語中心主義の傲慢さを察知し、複数の言語・地域・読者を包括する戦略を生み出せと読者に迫る」と指摘する箇所からも同様の問題意識が感じられる（58）。

アメリカ合衆国の文学とはだれによってどこで書かれ、だれ／どこについての物語を語り、だれによってどこで読まれるものなのか。単一の答えを与える必要はないだろうし、そもそも不可能でもあるのだろうが、ここではそうした問いをあらためて読者に突きつける作品としてヴェトナム生まれの合衆国の難民作家ヴィエト・タン・ウエンの短編小説「アメリカ人」（“The Americans”）を取りあげる。ウォルコウィッツが分析対象とする多くの小説とは違い、翻訳の営み自体を直接的・間接的に主題化する作品ではない。それでも彼女が論じる「生まれつき翻訳」の小説と同じように、この短編が「読者が「ネイティヴ読者」であることを阻」み、「複数の場所を占め」、「同時に複数の読者群に語りかけ」る様子を観察できればと思う（ウォルコウィッツ 17）。また、「アメリカ人」はほぼすべての文が英語で書かれているにもかかわらず——あるいはそれゆえに——この言語をめぐる政治的な問題に物語の細部をとおして触れてもいる。すでにその作品が多数の言語で流通している難民作家による「アメリカ人」と題された短編は、だれ／どこについての物語を語り、そのなかで英語という言語はどのように捉えられているのだろうか。

ヴェトナム戦争の終わり、1975年4月のサイゴン陥落／サイゴン解放の際に当時4歳だったヴィエト・タン・ウエンと彼の家族は難民となって合衆国に渡った。南カリフォルニア大学で教えながら作家・研究者として活躍するウエンは単独で執筆したフィクション作品としてこれまでに3冊を出版している。出版から約1年後にピューリッツァー賞とアメリカ探偵作家クラブのエドガー賞を同時に受賞した最初の長編小説『シンパサイザー』（*The Sympathizer*, 2015）はすでに多くの言語に翻訳されている。日本語版は2017年8月に早川書房から出版され、一種のスパイ小説である本作はジャンル小説としてのプロモーションを意識してかハヤカワ・ミステリ文庫に収録されている。2冊目の長編小説で『シンパサイザー』の続編でもある『革命と献身』（*The Committed*）の英語版は2021年3月に発売され、日本語訳が同年12月に出版された。翻訳出版の早さだけでなく、日本語版には「シンパサイザーⅡ」という英語版以上にシリーズ性を強調したサブタイトルがつけられているのも注目に値する。少なくとも合衆国と日本における『シンパサイザー』の流通過程を見るならば、文学賞が持つ影響力の大きさに加え、どのようなジャンルの作品として市場に送り出されるかが作品やその翻訳の受容を左右する様子が観察できるだろう。また、『シンパサイザー』のベストセラー化以降、ウエンはメディアでの発言機会が多くなった。知識人としてウエンが必要とされる背景には、ヴェトナム戦争時と同じく2010年代以降の世界において——さらに2022年現在の世界において——難民の存在が世界中の国々にとって大きな課題となっていることとも関係しているはずである。本稿が扱う「アメリ

カ人」は2017年2月に出版された短編集『難民たち』(*The Refugees*)に収録されている。収録作品は『シンパサイザー』以前に雑誌などに掲載されたものであり、長編での成功を受けて出版された事情が推測される。また、この短編集が日本語にまだ翻訳されていないことは長編小説が短編よりも出版の際に優遇される傾向、ウォルコウィッツの表現を借りるならば「長編小説こそ最も国際的なジャンル」である状況を示唆している(13)。¹⁾ ウェンの作品の出版・受容過程もまた文学作品の「流通を可視化する」のだといえる(ウォルコウィッツ44)。

「アメリカ人」はベトナム出身の難民を中心に据えたものではない点においてウェンの小説のなかでもユニークなものだ。短編のタイトルは当然これが「アメリカ人」たちの物語であると示唆している。主要な人物として登場するのは4人である。主人公ジェイムズ・カーヴァーはもうすぐ70歳になる男で、語り手によって段階的に明かされるのは、彼が合衆国南部アラバマ州の田舎に生まれたこと、空軍のパイロットとしてベトナム戦争時の北爆に参加したこと、退役後は民間航空会社のパイロットであったこと、引退後の現在は合衆国北東部に位置するメイン州の別荘地に家を持っていること、そして物語の現在においては娘が暮らすベトナムを妻とともに訪問していることである。小説は3人称の語り手を採用しているが、わずかな例外をのぞいてほぼすべての場面でカーヴァーが視点人物となっている。彼の妻ミチコは空軍時代のカーヴァーと六本木のジャズ・バーで出会った日本出身の女性であり、2人の娘クレアは2年前からベトナムに住み、現地の子供たちに英語を教えている。父親と娘の仲が険悪である様子が小説の冒頭から示唆されており、短編は父娘の関係性の変化をたどるものになっていく。カーヴァー家の3人に加えて重要なのがクレアのボーイフレンドであるコイ・レガスピで、彼が合衆国で生まれたのかベトナムで生まれたのかははっきりと書かれていないが、少なくともレガスピというスペイン語由来の名前は彼の養父母のファミリー・ネームであることが明示されている。レガスピはマサチューセッツ工科大学の博士課程の学生であり、地雷除去技術の研究と実践のためにベトナムに滞在している。知的なエリートとしての側面を強調される人物だ。21世紀、イラク戦争時代のベトナムを舞台に、これらの4人の人物を中心にした家族の物語として展開するのが「アメリカ人」である。

物語上の重要な軸となるカーヴァーとクレアの父娘間の対立関係は、少なくとも部分的にはアメリカ合衆国への帰属意識をめぐる問題に起因するものだ。空軍時代の経験を誇りに思い、(ミチコと結婚しているにもかかわらず)アジア人への蔑視を隠さず、家族にばかりならず頑固親父であるカーヴァーは合衆国が世界で一番偉大で特別な国家であると考え、愛国主義者であり、アメリカ例外主義の信奉者である。次の引用はクレアが暮らすアパートを見て、もっといい場所に住めないのかと問う両親と娘との会話である。

「この部屋だってほとんどの人が住んでるところに比べたらまし。仮にこの部屋を借りる人がいたとしても、一家全員で住むだろうしね。」

「お前はこの国の人間じゃないだろ。」カーヴァーは言った。「アメリカ人だろ。」[“You’re not a native,” Carver said. “You’re an American.”]

「わたしはその問題をなんとかしようとしてるわけ。」[“That’s a problem I’m trying to correct.”] (Nguyen 130)

アメリカ人ならもっとまともな場所に住むべきだという父親に対し、娘はアメリカ人であることこそが自分の解決すべき「問題」であると主張する。保守的な親とリベラルな娘の政治的対立が示される箇所であるのだが、語り手はこの直後にカーヴァーが黒人であることを明かして一見単純な父娘間の世代対立を複雑化させる。²⁾ここで前景化されるのは、「アメリカ人」というカテゴリーから読者がどのような存在を(無根拠に)想定してしまうのかという問題である。小説は続けて日本人の母親と黒人のアメリカ人の父親から生まれたクレアが幼少期から差別を経験してきたこと、そして南部の黒人として生まれ育ったカーヴァー自身も人生のさまざまな局面で白人中心社会からの差別を経験し、「自分がいるべき場所にいたことは一度もなかった」という感覚に苦しめられてきたこと、その現実から逃れるためにパイロットになり、「どこまでも高く空に飛び上がる」のを目標にしてきたことを明かす(132)。合衆国社会の中心からつねに排除されてきたにもかかわらず——あるいはそうだったからこそ——国家に過剰に同一化する父親とは対照的に、クレアはヴェトナムにきた今「自分のいるべき場所」を見つけた、自分には「ヴェトナム人の魂がある」と語る(134)。生きのびるために空を飛ぶことに一生を捧げてきたと自負するカーヴァーの姿は、一方では合衆国の黒人文学で描かれてきた「空飛ぶアフリカ人」(flying Africans)をめぐるフォークロアの伝統を想起させ、他方では現実と自分自身の過去から目をそらし続けるカーヴァーの人物像を強調する。³⁾「たいていのものは遠く離れたところからは美しく見える」と考えるカーヴァーは、現実ではなく理念・観念としてのアメリカに同一化している(136)。短編の終盤では彼が文字どおり地べたに引きずりおろされ、加害者としての自分の過去と現在の自分の老いに向きあい始め、娘との関係にも変化のきざしが訪れる様子が描かれる。彼が地面に倒れこみ、ヴェトナムの大地の「においと味が遠く離れた子供時代の庭の土を思い出させる」と感じる時、小説はヴェトナム南部と合衆国南部を太平洋を越えて接続し、合衆国を特別な場所として理想化し続けてきたカーヴァーの幻想を打ち砕く(144)。

ヴェトナム出身の難民作家が「アメリカ人」と題して発表した短編の中心に白人が1人も登場しないことは重要だろう。「自分がいるべき場所にいたことは一度もなかった」というカーヴァーの意識は、愛国主義的な言動を繰り返す彼が実際には合衆国内においてアウトサイダーであり続けたこと、故郷を失った難民に近い立場を生きてきたことを示唆する。また、父親のなかに複数の側面が混在しているように、日本人の母親とアメリカ人の父親を持ち、クレアというフランス語由来のファースト・ネームを持ち、ヴェトナム人の魂があると語り、合衆国ではなくヴェトナムに居場所を見つける娘のなかにも複数の側面が共存している。この短編でウェンが描き出す世界の特徴は、小説中でレガスビがほかの文脈で口にする「世界は純粋な場所じゃない」(“The world isn't a pure place.”)という台詞に凝縮されているのかもしれない(128)。ヴェトナムを舞台にしながらも基本的に英語のみで構成され、雑多な要素を組み合わせながら、遠い存在に近い存在であることを示していくのが「アメリカ人」である。ウォルコウィッツはキャリル・フィリップスの小説を論じながら、彼の小説が「多数の声」をサンプリングして照合し、その「社会集団を寄せ集めて肯定する」アンソロジーに似た役割を持っていると指摘しているが(ウォルコウィッツ 197)、ウェンの短編もまた同じような性質を備えた小説であるといえる。「アメリカ人」は環太平洋世界の複数の地点を結ぶ関係性の網の目から生まれたテキストである。

上述のように「アメリカ人」は基本的に英語のみで書かれている。実際には1箇所だけヴェトナム語の台詞が出てくるのだが、より興味深いのはだれかがだれかに英語を教える様子を描く2つの場面である。次の引用はクレアがヴェトナムの子供たちに英語を教えている学校を一家で訪ねる場面の一部である。

机のうしろの黒板にだれかが——クレア自身に違いない——大きな太い字で「受動態」と書いていた。その下に書かれていたのは「わたしの自転車が盗まれた」、そして「いろんな間違いが犯された」。*[On the blackboard behind the desk, someone—it must have been Claire herself—had written “The Passive Voice” in big, bold letters. Underneath was written “my bicycle was stolen” and “mistakes were made.”]* (133)

簡単な例文を使って初級英文法を教える様子をなにごなく描写する一節だが、ここでは英語という言語自体が前景化される。「受動態」という記述に引っ張られるかのようにして、2つの文のあいだで語り手の記述自体が能動態から受動態へと切り替わるのも読者の注意を引くための仕掛けであるかもしれない。この一節からまず考えられるのは、ヴェトナムで英語を教えるという彼女が選んだ仕事は小説全体の文脈でどのような意味を持ちうるかである。父親のカーヴァーがヴェトナム戦争時代の従軍経験を美化する一方で、娘のクレアは父親の世代とかつての合衆国がヴェトナムで犯した「いろんな間違い」の埋めあわせとして、英語を教えるためにヴェトナムに移住した。父娘は一見対極の立場にあるように見えるのだが、かつて合衆国が軍事的・政治的に翻弄した国で、今度はアメリカ人である彼女が教育を通して英語という言語の普及に貢献しているのだから、彼女自身の意図とは関係なく、結果としてクレアはソフト・パワーによる力関係の構築に加担していると捉えることはできるだろう。少なくとも親の世代がなした悪と子の世代がなす善という二項対立におさまらない関係性は、「世界は純粋な場所じゃない」という先ほどの引用とも響きあう。しかし同時に注意しなければいけないのは、「わたしの自転車が盗まれた」、「いろんな間違いが犯された」という容易に翻訳可能な2つの例文が、ただ英語が支配の道具であるだけではないことを示唆している点である。これらの例文を眺めるカーヴァーにとって、「大きな太い字」で力強く書かれた“The Passive Voice”——「受動態」とも「受け身の声」とも訳せるこの文法用語は多義性を抱えた翻訳の難しい句である——で発されることばは、娘の人生をコントロールしようとしてきた家父長的なカーヴァー自身に対する娘からの告発、ヴェトナムの人々を翻弄してきた合衆国に対する無名の子供たちからの告発としても機能するはずである。この場面において英語は「合衆国の英語中心主義の傲慢さ」を示すだけでなく（ウォルコウイツ 58）、声にならない声を代理・表象する言語ともなっている。英語が相反する複数の役割をにないうの様子を読みとることができるだろう。

クレアが書いた例文に観察される英語の両義性はこの言語を前景化するもう1つの場面でも反復される。

「2人は子供のころにクラスター爆弾の子弾で遊んでいて手脚を失ったんです」とレガスビが説明した。[……]「この場所の見張りとマンガース [mongooses] の世話を担当して

くれています。」

「マンギース [mongeese] じゃなくて？」ミチコが言った。

「間違いなくマンガース [mongooses] です、カーヴァーさん。」(138)

レガスピはロボットに接続したマンガースを使って地雷を発見・除去するための実験をおこなっている。ここで登場する動物と機械との融合体は複数の要素を抱えた存在を並置する短編全体のモチーフの一環をなしているのだが、引用箇所における「マンガース」という語の複数形をめぐるミチコとレガスピの議論もまた英語という言語自体が規範から逸脱し、ある意味で不純なものとなる様子を捉えたものだ。日本に生まれ、外国語として英語を学んできたことが想定されるミチコは、おそらく goose の複数形が geese であるといった知識を活用して mongoose の複数形が mongeese であると考えている。それに対してレガスピは mongooses が複数形であると正しい英語を教える。レガスピによるささやかな語学教育は知的なエリートとしての彼の人物像に合致するものだが、この場面が強調するのは正しく純粋な英語にこだわる彼の姿だろう。ミチコによる誤った複数形の使用は彼女がレガスピやクレアほどの教育を受ける機会を持てなかったことを示唆すると同時に、多様な話者によって英語が変形される過程を見せるものでもある。『オックスフォード英語辞典』が mongoose の正しい複数形として mongooses を、「非標準的」な複数形として mongeese をあわせて掲載していることを考慮するならば(“Mongoose”), ミチコによる不純な英語の使用もまたこの言語の一部として捉えられなければいけない。英語にかぎらずあらゆる言語は時間の流れのなかでつねに変化を繰り返していくのであり、その変化のプロセスは特定の集団によって独占されるものではない。英語を第一言語としない話者もまたこの言語の生成変化に関わるのである。

物語の展開とは無関係であるようにも感じられる語学教育をめぐる2つの場面から観察できるのは、英語がだれかからだれかに押しつけられる言語であるとともに、あらゆる人々によって意味とかたちを書き換えられていく言語でもあることだ。ウォルコウィッツのことばを借りるならば、ウエンの「アメリカ人」もまた、「自分が今手にしている本は自分たちのために書かれたのだ、今ページ上で出会っている言語は、独占的、本質的に、自分たちの国語なのだ」と決めてかかるような読者であることを阻んでくる」作品であり、「複数の読者群に語りかけ」る物語である(17)。「アメリカ人」の主要な登場人物がサンプリングされた「多数の声」の体现者であるとすれば、このテキストを構成する英語も単一であるように見える言語のなかに複数の声を響かせる媒体として機能する。英語という言語もまた複数の地点を結ぶ関係性の網の目から生まれるのである。

ヴィエト・タン・ウエンの「アメリカ人」を特定の国民国家や言語の枠組みを超えて読むときに明らかになるのは「世界は純粋な場所じゃない」という台詞が端的に示す世界の不純さであり、この作品がそのような不純な世界のために書かれた小説であるということである。「アメリカ人」とはだれなのかと読者に問いかける難民作家ウエンの短編は、必然的にアメリカ合衆国の文学とはだれによってどこで書かれ、だれについての物語を語るのかという問いを引き寄せる。「アメリカ人」はそうした問いに単一の純粋な答えを与えることはできないと、物語と言語の両方の側面から示してくれる小説ではないだろうか。

注

- 1) しかし長編小説 (novels) を短編小説 (short stories) よりも重要な形式と捉えたり、短編の執筆を長編のための準備期間・習作段階と捉えたりする一部の研究者や作家の姿勢が文学市場における長編小説の優位性を助長している側面もあるのではないだろうか。
- 2) これはおそらく多くの読者の暗黙の想定を揺るがす設定である。わたしは2021年度秋学期に東京大学教養学部1年生を対象とした語学の授業でこの作品を扱ったのだが、多くの学生が最初はカーヴァーが白人の登場人物であると想定していた。
- 3) 「アメリカ人」における飛翔のモチーフと「空飛ぶアフリカ人」のフォークロアとの関係性は上記の授業の際に学生からの指摘を受けて初めて意識したことを付記しておく。その授業では「アメリカ人」に先立ってエドワード・P・ジョーンズの短編「鳩を育てた少女」(“The Girl Who Raised Pigeons”) を読んでおり、ジョーンズの作品においても空を飛ぶことと自由の獲得との結びつきが重要な意味を持っていた。2つのテキストを結びつけて鋭い指摘をしてくれた学生にあらためて感謝する。

引用文献

- Dimock, Wai Chee. *Through Other Continents: American Literature across Deep Time*. Princeton UP, 2006.
- Giles, Paul. *American World Literature: An Introduction*. Wiley, 2019.
- “Mongoose, *N*.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, 2022, www.oed.com/view/Entry/121221.
- Nguyen, Viet Thanh. *The Refugees*. 2017. Grove Press, 2018.
- North, Joseph. *Literary Criticism: A Concise Political History*. Harvard UP, 2017.
- レベッカ・L・ウォルコウイツ 『生まれつき翻訳——世界文学時代の現代小説』 佐藤元状・吉田恭子監訳、田尻芳樹・秦邦生訳、松籟社、2021年

